

次ページへ続く

Continued on next page...

『尊師講式』をめぐって — 解説と翻刻 —

はじめに

『天台宗書籍目録』に、『尊師講式』という書名が掲載されている。魚山叢書九十三巻に収められた一本で、応永六年、西山法華山寺において景淳書写の奥書があるという。私は講式の調査を進めていて、そうした特異な題名に興味をそそられ、尊師とは誰をさすのか、是非とも確認したいと、かねて願っていたことであつた。

昭和五十五年の秋、私は大原へ取材におもむいた。そのおり実光院住職天納伝中師の特別の御厚意により、懸案の『尊師講式』を拝見することができた。さっそく通読してみると、題名に言うところの「尊師」とは、山城国葛野郡松尾最福寺の開基延朗上人をさすということがわかつた。

一読して、極めて貴重な講式であることが判明した。延朗が講式に取り上げられていて、その伝記上の新見が得られることも一つだが、それよりも中世初頭におけるいわゆる法華持経者の動静ないしは伝承の一端が、本講式を通じて捕捉できると考えられたからである。これは仏教史的に貴重な資料となるばかりでなく、国文学、とくに説話文学にもおも

しろい問題を提起するであろうと思つた。

さきごろ本講式を学界に紹介することを思ひたち、前記天納伝中師に翻刻の許可を願ひ出たところ、さっそく御快諾を賜わつた。という次第で、ここにこれまでいささか調査したところを添えて、魚山叢書収載の『尊師講式』を翻刻紹介したいと思う。私の調査に何かと便宜をお与え下さつた叡山学院教授で、かつ大原実光院住職であられる天納伝中師にこの場を借りて深甚の謝意を表するものである。(第四室 山田昭全)

一 内容概観

『国書総目録』をみると、華園文庫という叢書内に『尊師講式』が原本の形で取り込まれているよしである。これについてかねて物色中であるが、いまだ寓目の機会がなく、いかなる性質の本であるのか、まったく知るよしもない。したがつて、ここでは私の入手した唯一の本文である魚山叢書本をもつて、その概略を説明しておきたい。

本講式は、伝供・惣礼・唄・散花・梵音・錫杖・神分・祈願・表白・式文(三段)・六種廻向・釈迦宝号の順で演じられたものようであるが、このうち表白文と式文以外は、その項目の指示があるばかりで、偈

頌等の具体的記述は略されている。ただし式文の各段の末尾の伽陀と礼拝頌はその都度記されている。

表白文では、本講式を執行する趣旨を述べている。尊師（延明上人）の芳情によって法華山寺に逗留するようになった「弟子」が、親の恩よりも重い恩を受けた尊師の徳をしのび、その遺志を継ぐべく、ここに一座の講演を宣べるとしている。

式文は

第一惣擧「持経功德」

第二歎「尊師徳行」

第三広廻「向法界」

の三段から成る。第一段は法華経読誦の功德について述べている。はじめに法華経を讀誦する者は仏の莊嚴を以つて自らを莊嚴するに等しいという法華経法師品の一節をかかげ、以下中国の南岳大師・天台大師・法喜・善明・長安比丘・雍州沙門など法華持経者が感得または体現した不思議を記し、次いでわが国の性空上人・陽勝仙人・法空法師・叡桓上人等が見せた奇瑞を記している。そして、そうした先人が住んだ住居の様について言及している。

第二段は、尊師延明上人の徳を讃えた一段である。上人の出自から説きおこし、修業、治績、奇瑞などを挙げ、入滅までの閔歴を概観する。

尊師は入滅後兜率天に往生した。その墳墓は草木におおわれるが、遺品の瓶水や鉢飯はいまだに験を失っていない。それは天台大師や慈恵大師が、示寂後にも靈験を示したのに通じている。かくて、尊師の徳を慕う

縑素は、結縁のため、その靈前に供物をそなえることがいまだに絶えないと述べている。

第三段は、以上のように法華の持経者延明上人を讃歎した功德も、六道四生は一切の衆生に廻向することを述べた一段である。尊師は生前その徳を慕ってやってきた者を、すべてわが子のようにかわいがつた。だが上人と縁を結んだ道俗も、歳月の移るにつれてすでにその半ばが他界している。いまこの講演の功德をもつてそれら亡魂に廻向し、互いに一仏浄土を期したいと述べている。

以上が表白と式文の概略である。これをもつて本講式は京都葛野郡松尾最福寺の開基延明上人の遺徳を讃美することに主眼を置き、合わせて法華経読誦の功德を述べたものとの要約を導くことができよう。

二 作者と成立

本講式は誰がいつ著したものであろうか。まず作者であるが、これは今のところ未詳と言うほかはない。表白文の中に、「弟子、宿縁ありて、久しう影を此の山に留む。実^まに以んみれば、尊師の芳情に非ずといふこと無し」と言っている。「弟子」は、この表白文作者の自称であろう。延明の芳情によって長らく松尾に居住することになった弟子、これが本講式の作者ということになる。

だが、当時講式は誰もが自由に書いたものではなく、相当の学識をもつた僧に依頼して書いてもらうというやり方が一般的であった。たとえば解脱房貞慶は、高野山僧の依頼を受けて「地藏講式」を書き、また菩提

山僧の依頼によつて『弥勒講式』を書いて^註いる。依頼する側も相当に地位のある僧だったようだが、自分では作らず、貞慶に発注している。鴨長明は『月講式』を自らは作らず禪寂に依頼していた。そうした例があるから、本講式も、式文そのものは他に依頼したものであるかもしれない。もしそうだとすると、「松尾に長く居住することになった弟子」は、本講式の主催者、あるいは発願者に相当する。しかし、発願者と述作者とを兼ねることもあり得るわけで、その場合はこの延朗の弟子は、かなりの学識を持つ法華持経者ということになるのである。いずれにせよ、本講式の作者は今のところ未詳としておくのが最も穏当である。

それなら成立はいつであろうか。前述のように、本講式は延朗上人寂後、弟子がその遺徳をたたえるために執行した法会である。当然延朗寂後である。延朗の寂年は、本講式の第二段(76)の割注に、「尊師始住松尾丙申歲、終唱滅戊辰歲、愍教先後三十三年也」とあるので、承元二年(一一〇八)と判明する。『元亨釈書』十二の延朗伝をみると、寂年月日を承元二年一月十二日としている。また延朗が松尾に入った年を安元二年(一一七六)とも書いてある。安元二年は「丙申」の歳であるから、第二段割注の指摘と『元亨釈書』のそれとは完全に一致している。すなわち延朗寂年は承元二年であることは信ずるに足る。とすると、本講式はそれ以後の成立ということになる。

それならば、延朗寂後いつごろの成立であるか。本書の奥書に応永六年(一三九九)の年号が見えるが、これは本書の書本の書写年代を示したものである。これよりもさかのぼることは確実だが、どこまでさかの

ぼるか、今のところ明らかにする資料を知らない。

ただ推測の手がかりとすべきは、式文第三段の「今の平等の廻向、定て彼の靈志に相叶はん者か。又値遇結縁の道俗、半は既に他界に越く。必ず此の廻向に由つて、忽ちに巨益に預る可し」(99~101)という一文である。これは、延朗の松尾在住三十三年間に、弟子または信徒となった者の、半数近くが死去したと言っているところである。かりに当時の世代交替のサイクルを五十年と置くと、生存の道俗がなお半数残っているので、五十年の半分、すなわち承元二年以降二十年から三十年ぐらいの間に成立したという計算になる。実際の交替のサイクルは五十年よりも短縮されると見られるから、本講式の成立を延朗寂後三十年以内という見方はおおむね穏当ではなからうか。

三 延朗伝史料としての価値

本講式の史的価値について述べておきたい。

本講式の価値がどこにあるかを考えるとき、最初に思いつくのは、本書が延朗讚歎のために著述されている事実である。こころみに辻善之助の『日本仏教史』をみると、そこには延朗の記述はない。望月仏教大辞典をみても、延朗はとり上げられていない。ということは、今日の仏教史家に延朗はほとんど忘れさられた人物であることを意味している。

だが、『元亨釈書』をみると、そこに意外に多くのスペースをさいて、延朗のことが記述されている。これは釈書の著者に、延朗が大きな存在として認められていたことを示すものと思われる。つまり延朗は、かつ

での取り扱い方と今日のそれとの間に大きなへだたりがある人物なのである。過去に有名であっても、たちまち無名に帰する例は少なくないが、延朗の場合、どうも過去に大きな存在であったことさえ、忘れられようとしている。

本講式の存在は、延朗が当時一宗の祖師にも相当する人物として、崇敬されていた事実を、雄弁に物語っている。講式の中には、たとえば「弘法大師講式」「慈恵大師講式」「知恩講式」(『法然上人讚美の講式』)「聖徳太子講式」のように、祖師、先徳を讃歎する講式がある。「尊師講式」は明らかにこうした祖師讃歎の講式の中に入る。延朗が祖師に相当するという言いは、決して過大表現ではないのである。つまり、本講式の出現は、史料湮滅などの事情によって、空白になっている仏教史的事実を、われわれに明らかにしてくれるという点で、その価値を認めることができる。

それなら、本講式の式文第二段、「別歎尊師德行」に記述される延朗の履歴と、「元亨釈書」の延朗伝とをくらべていかなる差があるだろうか。端的に言って、釈書の延朗伝は本講式よりもはるかに具体的に詳細である。たとえば釈書には十五歳の出家、十九歳比叅寺還住、二十九歳叡山東塔山王院親殿に受灌頂、平治元年清盛の延朗住房包围事件等々、年代を追って延朗の行動、示験等をかなりくわしく記述している。これに対し「尊師講式」には、年代を追った記述はなく、また釈書に言うような示験譚もない。全体として具体的記述よりも讃辞や美辞が目立っている。

だが、そうした中であって、次のような記述は釈書には見えないものだが、延朗伝を考える上で重要な示唆となろう(括弧内の数字は翻刻文のラインナンバーである)。

①之に加うるに、悉曇の音韻を学むで鳥雀の啼鳴を聞き、梵漢の字源を尋て未決の奥義を悟る。(61〜63)

②法花を暗誦して多く星霜を経歴すと雖も、三十餘廻より以来、未だ他人をして知らしめず。唯秘して之を修し、只密かに之を行す。(63〜65)

③或る時は読み、或る時は誦す。或は科文を以って之を案じ、或は悉曇を以って之を操る。(67〜68)

④妙文を誦して眠る神、遙に異境に竊り、契印を結んで坐す心、遍く法界に満ず。(68〜69)

⑤瓶水を飲む者、皆邪靈を解き、鉢飯を食する者、忽に患悩を除く。(72〜73)

「尊師講式」は全体として延朗の法華持経者の面にスポットをあて、その優秀性を強調している。①③は延朗が悉曇を学んだことを伝えるとともに、法華経を学問的に追究していたことを推測させてくれる。法華持経ということは、単に誦誦するだけではなく、このような研究的行為も含んでいた点である。そうしたことを教えてくれる点で、この記述は貴重である。②は、延朗が隠徳の行者だったという指摘で、釈書にはまったくうかがい得ぬ記述である。

④は、延朗が読経や契印を結んで心の自在を獲得したということ述べているのだが、法華持経者の行法の目ざすところがどういうところに

あつたかを教えてくれて、はなはだ貴重である。

⑤は、延朗の験力について言っている。瓶と鉢は持経者の必備の法具だったようだが、延朗の信者は、その瓶の水、鉢の飯をいただいて魔を払い、病気を治していたものようである。少しあとのところに延朗叔後も「瓶水未だ験を失はず、鉢飯徳を施」(79、80)したとある。これらは釈書に記されている示験譚に比べ、極めて地味であるが、しかし延朗が松尾において多数の信者を獲得したのは、実際はこうした瓶水や鉢飯の施与によると考えられる。すなわち、本講式の記述は延朗と信徒との結びつきをはかる上で、はなはだ貴重な示唆を与えてくれるのである。

四 「法華験記」との関連

【尊師講式】が延朗伝の史料として価値を持つのは当然として、そのほかにもう一つ、『大日本法華験記』の世界を考えると、貴重な示唆を与えてくれるということも指摘しておきたい。

前述のように、本講式の第一段は法華持経の功德を論じたところであるが、この中に震旦と本朝の法華行者の示験譚が並べてある。まず震旦では①南岳大師、②天台大師、③釈法喜、④釈普明、⑤長安比丘、⑥雍州沙門、⑦釈遺俗の舌根、⑧東看山の靈屑の八例がある。これらの示験譚が何にもとづいて列挙されたかを調べてみると、①③④⑥⑦⑧は唐の僧祥の『法華伝記』から取材したものであり、②は灌頂撰「隋天台智者大師別伝」から句を抜き出してつづり合わせたものである。ただ⑤の長安比丘の話だけは、いまのところ出典が明らかではない。

これに対して、本朝の法華行者としては、⑨性空上人、⑩陽勝仙人、⑪法空法師、⑫叡桓上人、⑬吉野の奥の持経者の五例が並べられている。この五例はすべて『大日本国法華経験記』に取材したと断じてさしつかえない。この事実は「尊師講式」を考察する上でかなり重要なエレメントになると思う。

私がかねがね「法華験記」の世界が、中世にどのように継承されたか、という問題に大きな関心を持つ者である。周知のように、首楞嚴院鎮源の選した『法華験記』は、法華持経者の説話を集めたものとしては、よくととのつたものである。井上光貞氏が指摘されるとおり、同じ天台僧の編集でありながら、往生伝の世界とは思想・信仰を異にする別系統の世界を扱っている。ところが、往生伝のほうは後続書が次々と編まれたのに対し、『法華験記』の系列は、ぶつくりとあとがとだえている。これはどうしたことかという問題意識が私にはある。

本講式は、そうした問題意識を持つ者に、貴重な追跡の手がかりを与えてくれる。式文の第一段に、『法華験記』の五人の人物を引いていることは、本講式が『法華験記』の世界と結びついていることを何よりも有力に物語るものであろう。すなわち、いわゆる法華持経者の活動はその後も細々ながら受けつがれ、松尾の延朗に注いでいるということ、本講式は示しているのである。したがって、今日の仏教史家の見落としてある延朗およびその周辺を根気よく掘り下げてゆくと、ある程度、『法華験記』以後の空白を埋めることができるのではないだろうか。

本講式が過去の空白部を埋める手がかりになるといふことがどんな意味を持つか、幾つかの例をあげて説明してみよう。

鴨長明の『発心集』に、「松室童子、成仏の事」(37)、「三味座主の弟子、得法華經験の事」(38)、「淨藏貴所、鉢を飛ばす事」(39)という、『法華験記』の世界とかかわりを持つ一連の法華持経者の説話が採り込まれている。『発心集』はおおむね念仏系の説話を集めているから、このような持経者の話がまじっていると、そこだけがいたく目立つのである。

こうした説話の異質性からくる唐突感が、ときに『発心集』説話の一部後人増補説を導きやすいのであるが、ここに延朗の存在を重ねてゆくと、唐突感がほとんど解消するのである。延朗は承元二年(一一〇八)松尾において入寂する。そのとき長明は五十四歳、大原から日野に移住する前後のことであつた。老熟した長明がこの延朗の存在を知らぬはずはなく、またその死についても聞き及んでいたものと考えられる。とすると、ここに、長明が延朗の存在または死を契機として、法華持経者の世界に関心を寄せることも十分あり得たわけである。

【松尾社家系図】というものがある。この中に是雄——月雄——雪雄

——峯雄——松世——仲算という血筋で仲算が登場する。仲算のところ

に付されている注記に「師事于興福寺興静僧都。応和三年八月廿日清源殿興山門良源宗論。春日大明神擁護之人。仲算所居地号松室。坊名貞松房」とあるので、これはまさしく松室仲算と同一人といえる。【松尾社家

系図】にはこのほかに兼政——兼盛の血脈に寛円という権僧都がいて、これが長明の時代に、延朗の開基した最福寺に住んでいる。この系図がどこまで信用できるか知らないが、ここで言いたいのは、長明の松室童子説話の取材は、松尾社經由だったかも知れないということである。

もう一つ、『発心集』の「三味座主の弟子、得法華經験の事」は、『法華験記』上十一、「吉野奥山の持経者某」とまったく同じ話をとつたものであるが、『発心集』の記事の末尾に、「記として、彼此にしろし置きける文あれど、事しげければ、覚ゆるばかりを書きたるなり」とあつて、「記」(『法華験記』)のよななものに、拠らなかつた旨をわざわざこたわつてゐるのである。『法華験記』に拠らなかつたのならば何から引いたのかという疑問が当然おこつてくるわけであるが、三木氏はその疑問について「この説話のみを記した散佚書もあつたのであろう」と注しておられる。^(註)

ところが、今やわれわれは、『尊師講式』の式文に、「彼の義容の為に、水瓶を雲中に投げて、帰路を示した吉野の奥の持経者」という一文が存在することを知つた。これは、松尾に「吉野奥山の持経者某」と全く同じ説話が伝えられていたことを実証するものである。すなわち、長明が『法華験記』に拠らなかつたならば何に拠つたかという疑問に対して、ここでもまた、それは松尾經由で入手した資料かもしれぬという推測が成立するのである。長明と松尾の間は、中間に『尊師講式』あるいは延朗を介在させると、意外に近づいてくるようである。

【発心集】に関連して、慶政の『閑居友』がある。ここにも『法華験

「記」の世界に通ずるかすかな脈絡をたどることができる。

「閑居友」上巻十六話は「下野守義朝の郎等の心をおこす事」という説話である。源義朝の郎等だった四郎入道という者が、塩・五穀を断ち、柿の麻の小袖一枚で夏冬を過した。そば粉を一日一回食い、それがなくなるときは芹、松の葉を食べてしのいだ。その結果肉体は骨と皮ばかりになった。そのような状態で四郎入道は深山に入り、つばき油をしぼり、これを灯油として寺々に配りつつ、すでに八十歳になったという話である。

この話には説経や念仏のことは全く出てこない。その衣食のことだけがやや具体的に紹介されている。四郎入道という男、いつたいどんな信仰を持っていたのかという疑問がおこってくるわけだが、私はこれを法華持経者の系列に入るものと見る。その理由は四郎入道の衣食が「法華験記」に登場する持経者のそれと共通する点が目立つからである。まず四郎入道は「塩たち、五穀をた」ったという。そして、一日一回だけ「そばむぎの粉のあららかなるを」食べ、それがなくなると、芹・松の葉を食べたという。さらに着物は「糸綿いとわたの気をきず、夏冬をわかず柿の麻の小袖のあはせたるを一つ」だけ着たとある。

「法華験記」から、塩・五穀を断つた人を拾うと、奈智山の応照、叡山西塔宝幢院の陽勝仙人、金峰山の良算、越中の海蓮の四人をあげるこゝとができる。海蓮には主食と衣服の記述がないが、あとの三人は松葉このみくろあか（応照）・菓このみくろあか（良算）・菜蔬このみくろあか（陽勝・良算）を食し、衣服は紙の法服（応照）・蘿もも（良算）を着したとある。

このほか四郎入道が骨と皮ばかりにもかかわらず長寿を保ったという

が、「法華験記」の愛太子山鷲峰の仁鏡比良山蓮寂仙人も食物と長寿の二点で共通している。

このようにみえてくると、「閑居友」の四郎入道は、「法華験記」に登場する典型的な法華持経者とまことによく類似している。という次第で、義朝の郎等四郎入道を法華持経者の一人とみなすわけである。

さて、本題にかえって、この四郎入道の説話を慶政はいかにして入手したかを考えるとき、必然的に松尾という土地が浮かび上ってくる。慶政は一般に松尾の慶政とよばれ、松尾の法華山寺の開基であり、そこに住んだ人である。しかも延朗の弟子とも言われ、法華山寺に延朗の墓を建てた人である。法さらに慶政の書いた「法華山寺縁起」によれば、法華山寺には延朗上人影像が安置ほされていた。慶政がこのように法華持経者延朗と深いかわりを持つている点からいって、四郎入道の話は、この松尾に伝えられたものを拾い上げたのであろうと推測されるのである。

もう一つ、尊卑分脈によると、延朗は源義親の孫である。四郎入道の主君義朝は延朗の父義信と従兄弟の関係にある。つまり、延朗と義朝とは同族であった。「元亨釈書」の延朗伝に、平治乱のとき、清盛は延朗の住房をかこみ、「お前は義朝の一味で、源氏の武器をかくしている。出せ」と迫った。延朗が一心に法華経を誦すると、端正な天童が空中から現われ、「兵士をねむらせるからその間に逃げよ」と告げ、はたしてその通りになったので、延朗はことなきを得たということが記されている。この話は義朝と延朗とが無関係ではなかったことを示すもので、とすると、義朝の郎等だった四郎入道が、法華持経者になったのも、その逸事が松

尾の延朗の周辺——慶政のところにとどいたのも、いかにもあり得べきことと思えてくるのである。^{注師}

以上のように「尊師講式」の存在は、中世の国文学作品の研究にも、興味深い示唆を与える。さがしてゆけば、この外にも関連してくる作品がまだ出てくるであろう。いずれにせよ、平安中期には厳存した法華持經の信仰が、その後おつとりとだえたかに思われたものが、細々ながらも継承され、中世初頭において、延朗上人によって松尾に復興したという事実を教えてくれる点に、本講式の最大の価値が認められるのである。

六 松尾の衰微

中古・中世において、かなり栄えていたはずの修験道が、ほとんど衰微してしまったがために、今日中古・中世の民俗や思想や信仰のある部分が、ちょうど密室に閉じ込められた形になって、われわれの理解をばむという、そういう現象があるように思う。延朗によって、松尾が法華持經という古代的信仰の拠点として一時復活したことが、「尊師講式」によってたしかめられるわけであるが、しかし大勢としてこの信仰が衰亡の道をたどっていたことは否定できない。

法華持經はなぜ亡びたのか。一つの理由として、松尾が中世において徹底的に破壊されたことがあげられるかと思う。「太平記」巻八、「谷堂炎上事」に、元弘三年（一一三三）、千種忠顕の指揮する官軍が京都六波羅の幕府軍と戦ったとき、松尾は合戦の渦中にまき込まれ、「京中の軍

勢、谷ノ堂・峯ノ堂已下浄住寺・松ノ尾・萬石大路・葉室・衣笠二乱入テ、仏閣神殿ヲ打破リ、僧坊民屋ヲ追捕シ、財宝ヲ悉ク運取テ後、在家ニ火ヲ懸ケレバ、折節魔風烈ク吹テ、浄住寺・最福寺・葉室・衣笠・三尊院、惣ジテ堂舎三百余箇所、在家五千余宇、一時二灰燼ト成テ、仏像・神体・経論・聖教、忽ニ寂滅ノ煙ト立上」ったという。「太平記」はここで、谷堂と呼ばれる最福寺が、延朗の草創以来、堂塔・伽藍、仏像・経巻をととのえた仏教の一大中心地となっていたことを述べ、それが無残にも破壊されたことを歎いている。

松尾がこのときの破壊だけで衰亡したのでないことは、たとえば「看聞御記」永享五年（一四三三）三月十八日に、御記の筆者伏見宮が、群臣を連れて、この谷堂や峯堂（慶政の開いた法華山寺）に参詣、多年の念願がかなって満足だったと記している点からも推測できる。その後も破壊と復興が幾度か繰り返されたに相違ない。ことにこの松尾は丹波路の入口部分にあるため、南北朝以降の動乱期にはしばしば軍兵のゆきかう場になったものと思われる。こうして、法華持經そのものの衰微と相まって、延朗の興した松尾は、その荘麗な宗教的聖地のおもかげを、ほとんどどめぬ状態にまで衰えてしまったものと思うのである。

魚山叢書にわずかに書きとめられてあった「尊師講式」は、そうした湮滅した文化の存在を知らせ、かつ探査の手がかりを与えてくれる点ではなほだ価値が高いということを結論にして、この拙い解説をひとまず閉じておきたい。

注

(1)拙稿「高野山金剛三昧院本」発心講式」奥書の筆蹟」〔国文学踏査〕十二号、昭57・9刊〕参照。

(2)ちなみに大正蔵経五十一卷「法華伝記」における関係記事の所在を示しておく。①南岳大師―「陳南岳衡山积慧思二」(P 59 a)、③法喜―

「唐雍州梁寺积法喜七」(P 61 a)、④普明―「宋臨淄积普明七」(P 63

a)、⑥雍州沙門―「雍州僧法常十八」(P 64 b)、⑦积遺俗の舌根―「范陽王侯寺僧十七」(P 64 a)、⑧東看山の靈屑―「齊并州誦經舌十九」(P 64 b)

(3)大正蔵経五十卷「隋天台智者大師別伝」の関係記事を掲げる。

誦法華經無量義經普賢觀經、歷涉二旬三部究竟。進修方等懺心淨行動勝相見現前。見道場廣博妙飾莊嚴。而諸經像縱橫紛雜。身在

高座足踞繩床。口誦法華手正經像。是後神融淨爽利。常日逮受具足律藏。精通先世萌動而常樂禪悅快快。(中略)即示普賢道場爲説

四安樂行。於是昏曉苦到如教研心。于時但勇於求法而貧於資供。切栴爲香栴盡則繼之以栗。卷簾進月月沒則煉之以松。息不虛誑言

不妄出。經二七日誦至藥王品諸佛同讚是真精進是名眞法供養。到此一向身心豁然寂而入定。持因靜發照了法華。(P 191 c)

傍線部分が講式に引用されている。講式の当該部分の意味のとりくさは、どうも引用の拙劣さからくるものようである。あるいは講式の本文に誤脱があるか。

(4)これも日本思想大系「往生伝 法華験記」の関連箇所を示しておく。

⑨性空上人―「第四十五播州書写山の性空上人」、⑩陽勝仙人―「第四十四叡山西塔宝幢院の陽勝仙人」、⑪法空上人―「第五十九古き仙の靈しき洞の法空法師」、⑫睿桓上人―「第四十六叡山安樂院の叡桓上人」、⑬吉野の奥の持経者―「第十一吉野奥山の持経者某」

(5)「往生伝 法華験記」末尾の井上氏執筆の文献解題(七二四頁)参照。

(6)広田哲通氏は、「法華験記」に収載される二九人の説話を、「法華験記」固有の持経者と、一般の往生伝にもみえる浄土教的世界の聖との

二系列に区分されるが、ここにあがる五人は、いずれも「法華験記」固有の世界に帰属する人として区分されている。「仏教文学」第六号、「法華持経者の話―本朝法華験記の二側面―」(昭和五十七年二月)参照。

(7)日本古典集成「方丈記・発心集」一六九頁の頭注参照。

(8)橋本進吉著「伝記・典籍研究」所載「慶政上人の事蹟」参照。

(9)図書寮叢刊「諸寺縁起集」所載「法華山寺縁起」参照。

(10)なお、原田行造氏は、「閑居友」の中に東国方面の説話が多いこと、それとこの「下野守義朝の郎等の心をおこす事」は、清和源氏であった延朗の周辺にそれらが集まっていたのを、慶政が採集したものであると推測しておられる。(原田行造著、「中世説話文学の研究」上、所収「慶政の師僧管見」参照)

尊師講式

翻刻凡例

京都、大原勝林院所藏魚山叢書に収載される「尊師講式」を翻刻するにあたって次の方針をとった。

一、読みやすくするため、漢字は今日の通行の字体に改めた。

二、特殊な異体字・略字体も通行の漢字に置きかえた。

三、明らかに誤字と思われる文字も訂正しなかった。

四、原典には返点が付されているが、今日通行のものとはやや異なる打ち方をしているものでもなるべく原典通りに翻刻した。

五、送り仮名で「ノ」「ー」などはこれを「シテ」「コト」のように改めた。ただし、「玉」「云」など漢字を使っているところは「タマフ」「イフ」などのように仮名におきかえた。また原典の送り仮名には濁点表記がない。この翻刻もそれに従った。

六、原典にはわずかではあるが二通りの送り仮名を記しているところがあるが、活字表記が困難なので、便宜その一方のみを示した。

七、原典にある読点および二字連続音読符号（□ー□）、二字連続訓読符号（□|□）はそのまま残した。

八、翻刻にあたって、後の検索の便をはかり、行は原典通りとし、行頭にラインナンバーを付した。

尊師講式

1 先傳供 次惣礼 次頌 次散花 次梵音

2 次錫杖 次神分 次祈願 次表白

3 謹敬白靈山界會。釈迦如來。平等大會。一乘

4 妙典。普賢文殊諸大薩埵。身子目連諸賢聖衆。

5 惣十方三世一切。三宝而言。我等希受三人界生。適

6 遇遺教時。獨觀先身悲淚餘眼。曾種何善

7 根。今方得此報。而景不覺早移。日不期自

8 暮。已任時命去。忽從歲月ノ除。情思於旧遊。

9 猶空春夜夢。靜安於往事。寧異水中月。心

10 觸事而動。觀隨時而發。於是松風鬪韻。慕

11 靈睿法師之古。漢月靜澄。思勝如上人。之昔。雖

12 不齊。與人。亦非無所思。仏前仏後悲。忍以休

13 於是。耳。誠是。如來加護之力。因縁和合之故。弟子

14 有三倍縁。久留影於此山。實以無非。尊師芳

15 情。一哀一喜欲罷。不能。豈敢翹點。碧公

16 云。哀々父母。生我。劬勞。吾師之徳。復過於是。

17 復人觀其徳而不生悲感。木石無異也。因茲

18 為備彼遠志。聊宣講演。耳。志趣不略。

19 為三段。一惣。學持經。功德。二別。歎尊師

20 德行。三廣廻向法異也

21 第一。惣。學持經。功德者。佛。説其功德言。其

22 有説。誦法華經者。常知是人。以三仏莊嚴。而

23 自莊嚴。則為如來。所荷擔。云々。如來金言。碑哉

24 貴哉。若如教修行。大道足於是。耳昔。南岳大師。

25 誦此經。夢普賢乘白馬來。摩頂。未識

26 文自然解了。所摩自然如肉髻。十年之中。誦經

27 声不綴。終朗然。悟法華三昧。又天台大師。誦

28 此經。忽現勝相。道場曠博。妙飾莊嚴。

29 身在高座。口誦法花。是後心神融淨。爽

30 利常日。昏曉。到如教研心。息不虛輕

31 言不妄出。經二七日。誦整然。照了法華

32 三昧。又尺法喜。誦此經。數滿八百。白牛。宝車。

33 入其室。尺普明。誦此經。每至勸發品。普賢

34 乘白象。立其前。又長安。比丘感深沙大將。

35 雍州。沙門。得化現童子。是皆依此經也。

36 至如彼尺。遺俗。舌根。終不朽。東看山。靈一肩。

37 忽以鼓動等。視聽之輩。誰懷一緩心乎。又

38 本朝。性空上人。依此經。力現淨六根。親拜金

39 剛薩埵。受兩部。大法。而見。文殊師利。得當

40 來。記別。陽勝仙人。昇天入地。無有障導。

41 見^レ仏聞法心得^ニ自在^ニ。法空法師洞^ノ。十羅刹。

42 現^レ形鎮^ニ為^ニ擁護^ニ。睿桓上人室。鬼神常^ニ途侍^ニ。

43 願^ニ作^ニ給^ニ仕^ニ如下^ニ彼^ニ為^ニ義審^ニ。投^ニ水瓶^ニ於^ニ雲中^ニ而

44 示^ニ帛路^ニ。吉野^ノ與^ニ持經者^ノ。每^ニ至^ニ食時^ニ。天童

45 棒^レ供。每^ニ望^ニ夜闌^ニ。異^ニ類來^ニ集^ニ上^ニ。任^ニ經^ニ現^ニ文^ニ。雖

46 不足^レ驚^ニ。復^ニ猶恐^ニ遇^ニ三辺鄙^ニ之分^ニ。凡^ニ旧記^ニ

47 所載^ニ。其^ニ禪^ニ居^ニ甚苦^ニ。或有^ニ洞^ニ。用^ニ五色^ニ苔^ニ葺^ニ其

48 上^ニ。以^ニ五色^ニ苔^ニ成^ニ其^ニ扉^ニ。綴^ニ青苔^ニ。為^ニ袈裟^ニ。稱^ニ

49 青苔^ニ為^ニ衣^ニ或有^ニ洞^ニ。松樹覆^ニ其上^ニ。風吹^ニ松聲^ニ。

50 不^レ異^ニ音^ニ。案^ニ。雨降^ニ。苑^ニ如^ニ笠^ニ。熱時^ニ施^ニ冷氣^ニ。云々

51 如此^ニ。樓^ニ隱^ニ有^ニ與^ニ有^ニ哀^ニ。每^ニ見^ニ其事^ニ跡^ニ。無^ニ安^ニ

52 心識^ニ。矣^ニ。是^ニ。國^ニ土^ニ福^ニ田^ニ。亦是^ニ衆生^ニ知^ニ識^ニ。其^ニ

53 所至^ニ。方^ニ。應^ニ隨^ニ向^ニ禮^ニ。此言^ニ可^ニ仰^ニ信^ニ。仍唱伽

54 陀曰

55 吾滅後惡世能持是經者当合掌礼敬如供養世尊

56 南無平等大会一乘妙典五種六種諸大法師^{三反}

57 第二別^ニ歎^ニ尊^ニ師^ニ德行^ニ二者^ニ。雖^ニ生^ニ武^ニ勇^ニ之家^ニ。太^ニ八^ニ師^ニ

58 婆伽自^ニ孫^ニ對^ニ馬^ニ守^ニ。以^ニ慈悲^ニ為^ニ室^ニ。雖^ニレ^ニ為^ニ函^ニ矢^ニ之^ニ

59 主^ニ。以^ニ忍辱^ニ為^ニ衣^ニ。忽^ニ于^ニ夕^ニ死^ニ。貴^ニ三千^ニ朝^ニ聞^ニ。惣^ニ患^ニ

60 過^ニ人^ニ。可^ニ謂^ニ宿^ニ智^ニ。經^ニ耳^ニ持^ニ此^ニ心^ニ。聞^ニ聲^ニ止^ニ圍^ニ。

61 五時^ニ。玉^ニ清^ニ。三^ニ密^ニ鏡^ニ明^ニ。加^ニ之^ニ學^ニ悉^ニ曇^ニ之^ニ音^ニ韻^ニ。

62 聞^ニ鳥^ニ雀^ニ之^ニ嘯^ニ鳴^ニ。尋^ニ梵^ニ漢^ニ之^ニ字^ニ源^ニ。悟^ニ未^ニ決^ニ。

63 之^ニ奧^ニ義^ニ。唯^ニ獨^ニ自^ニ明^ニ了^ニ。餘^ニ人^ニ所^ニ不^ニ見^ニ。雖^ニ暗^ニ誦^ニ

64 法^ニ花^ニ經^ニ。歷^ニ多^ニ星^ニ霜^ニ。三^ニ十^ニ餘^ニ迴^ニ以來^ニ。未^ニ令^ニ

65 知^ニ三^ニ他^ニ人^ニ。唯^ニ秘^ニ修^ニ之^ニ。只^ニ密^ニ行^ニ之^ニ。受^ニ持^ニ誦^ニ誦^ニ之^ニ

66 勤^ニ。殆^ニ不^ニ愧^ニ上^ニ古^ニ。如^ニ說^ニ修^ニ行^ニ之^ニ教^ニ。以^ニ夜^ニ繼^ニ晷^ニ。

67 或^ニ時^ニ。讀^ニ或^ニ時^ニ誦^ニ。或^ニ以^ニ科^ニ文^ニ。而^ニ案^ニ之^ニ。或^ニ以^ニ

68 悉^ニ曇^ニ。而^ニ操^ニ之^ニ。誦^ニ妙^ニ文^ニ而^ニ眠^ニ。神^ニ遙^ニ竊^ニ異^ニ境^ニ。

69 結^ニ契^ニ印^ニ而^ニ坐^ニ心^ニ。遍^ニ滿^ニ法^ニ界^ニ。處^ニ眠^ニ處^ニ夢^ニ。

70 如^ニ現^ニ如^ニ覺^ニ。漸^ニ掃^ニ罪^ニ障^ニ塵^ニ。豫^ニ知^ニ壁^ニ外^ニ事^ニ。

71 稍^ニ洗^ニ六^ニ根^ニ垢^ニ。似^ニ見^ニ三^ニ境^ニ內^ニ物^ニ。或^ニ時^ニ本^ニ尊^ニ示^ニ瑞^ニ。

72 而^ニ擁^ニ護^ニ。或^ニ時^ニ守^ニ神^ニ隱^ニ形^ニ以^ニ隨^ニ遂^ニ。飲^ニ瓶^ニ水^ニ

73 者^ニ。皆^ニ解^ニ邪^ニ靈^ニ。食^ニ鉢^ニ飯^ニ者^ニ。忽^ニ除^ニ患^ニ惱^ニ矣^ニ。

74 以^ニ曾^ニ供^ニ養^ニ十^ニ萬^ニ億^ニ仏^ニ。於^ニ諸^ニ仏^ニ所^ニ成^ニ就^ニ大^ニ願^ニ。

75 慙^ニ衆^ニ生^ニ故^ニ。生^ニ此^ニ人^ニ間^ニ。終^ニ即^ニ初^ニ春^ニ十^ニ二^ニ夜^ニ

76 半^ニ。如^ニ言^ニ唱^ニ滅^ニ。尊^ニ師^ニ始^ニ住^ニ松^ニ尾^ニ內^ニ中^ニ成^ニ終^ニ。唱^ニ滅^ニ諷^ニ音^ニ。

77 無^ニ統^ニ窟^ニ竹^ニ鳴^ニ風^ニ。香^ニ花^ニ粧^ニ盡^ニ。只^ニ春^ニ窓^ニ梅^ニ尊^ニ

78 師^ニ生^ニ兜^ニ率^ニ寶^ニ閣^ニ自^ニ受^ニ法^ニ業^ニ。遵^ニ弟^ニ反^ニ袂^ニ音^ニ無^ニ

79 餘^ニ響^ニ。然^ニ龍^ニ填^ニ雖^ニ掩^ニ妙^ニ迹^ニ恒^ニ通^ニ。瓶^ニ水^ニ未^ニ失^ニ驗^ニ。

80 鉢^ニ飯^ニ猶^ニ施^ニ德^ニ。葉^ニ落^ニ枝^ニ摧^ニ。風^ニ來^ニ不^ニ韻^ニ。若^ニ無^ニ

81 勝^ニ德^ニ無^ニ三^ニ守^ニ護^ニ神^ニ豈^ニ如^ニ此^ニ乎^ニ。如^ニ彼^ニ智^ニ者^ニ大^ニ師^ニ。

82 入^ニ三^ニ禪^ニ窟^ニ以^ニ後^ニ。連^ニ雨^ニ不^ニ住^ニ。弟^ニ子^ニ咒^ニ願^ニ動^ニ泥^ニ洄^ニ

83 之^ニ聲^ニ。應^ニ乎^ニ雲^ニ開^ニ上^ニ者^ニ。矣^ニ。顯^ニ高^ニ德^ニ尤^ニ固^ニ也^ニ。

84 又昔慈惠和尚、之弟子明普閣梨。自冥途而還
 85 之時。問冥官云。修何行業。必生極樂。冥官
 86 答云。汝師權化。慙慙奉事。必得往生。溘哉
 87 此事。今結緣。緇素。隨分作給仕。或爐辺
 88 燎火。或瓶鉢盛水。或捧菜。或送半菓
 89 面々。懇志。各々不虛。与物結緣。實此謂哉
 90 仍唱伽施曰
 91 若親近法師速得菩薩道隨順是師学得見恒沙仏
 92 南無平等大会一乘妙典持經法師尊師聖靈三反
 93 第三広廻向法界者。以持經法師。歎德所生。功德。
 94 廻向六道四生。一切衆生也。一切衆生。皆是過去師
 95 長。父母主君男女也。隔生即妄。雖不知之。任
 96 仏所覽。須致哀慙。就中。尊師在世之時。
 97 於有因契而來之輩者不謂遠近親疎。
 98 皆与一子憐愍。如彼鳩鶴。將來七子。且從
 99 上与餌夕。從下養之。今平等廻向。定相叶
 100 彼靈志者歟。又值遇結緣道俗。半既趣他
 101 界。必由此廻向。忽可預巨益。又如下文殊師利。
 102 來。告性空上人。言。今結緣衆。必生汝成仏
 103 國。皆可得不退転。今日結緣衆。亦必生一仏
 104 淨土。為所化機根。矣于時一音遍振。法雨
 105 等灑。妙旨銘肝。領歲徹骨。漸被引

106 導。親拜聖衆猶如清夜見星。爾時歛
 107 喜有物譬倫乎。願以此廻向功德。天上天下。
 108 同辭愛網。胎卵濕化。共出塵籠。仍唱
 109 伽陀
 110 願以此功德云々
 111 南無平等大会一乘妙典法界衆生平等利益三反
 112 次六種廻向 釈迦宝号
 113 本云
 114 応永第六己卯南呂下二日酉己點西山法花山寺
 115 南尾樞本坊書写畢 右筆景淳
 116 文明十七年二月廿六日率爾写之了
 117 此式嵯峨谷峯兩寺共所用本也
 118 山王御本寺之絵言アリ 無明昧性本自不有妄想因縁和合
 119 資頭盧尊者云 此文嚴靈授